

P1-084

小手術を初めて受ける幼児後期患児の看護師による手術説明の受け止め方 ～親の捉える子どもの受け止め方と子どもの反応の実態調査～

田中 まゆみ

自治医科大学附属病院

【目的】

A 病棟では、入院時に看護師が子どもへ入院や手術について、幼児向けに作成した動画とすごろくマップを用いて説明を実施している。説明後、看護師は子どもの理解状況を確認し、子どもの反応に合わせて説明を補足しているが、子どもが分かっているのか疑問に感じていた。そこで、小手術を初めて受ける幼児後期の子どもが、看護師の説明をどのように受け止めているかを明らかにすることを目的に調査を行った。親の捉え方と子どもの反応から、子どもがどのように看護師の説明を捉えているかを明らかにしたいと考えた。

【方法】

小手術を初めて受ける幼児後期の子どもと親を対象に、質問紙法と観察法で調査した。質問紙は入院当日に親へ渡し、退院時に回収した。質問紙では、親が手術前・当日・手術後の子どもの反応や行動から、看護師の説明項目（30 項目）ごとに子どもの理解度を 4 段階で評価をした。また、説明内容について意見を聞いた。看護師が子どもに説明する場面を研究者が観察し、子どもの反応を 7 項目でチェックするシート（以下、子どもの反応観察シート）に記録した。分析は、質問紙と子どもの反応観察シートの項目ごとに単純集計し、平均値を算出した。研究者所属施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。開示すべき COI はない。

【結果】

対象者は 9 組の子どもと親で、子ども全員が入院前に親からの説明を受けていた。質問紙の結果、手術前の看護師の説明について、親は説明項目全体の 6 割を「子どもは分かっている」と評価した。手術当日の行動は、9 割が「できた」と捉えていた。また、親全員が「看護師の説明内容は子どもに合っている」「看護師の説明は必要である」と回答した。子どもの反応観察シートの項目では「子どもが正しく答えた」のは 4 割であった。「領き」や「分かったと答えた」反応を含めると 8 割が理解できていた。

【考察】

子どもは、看護師の説明について全てを理解できてはいないが、当日は手術に向けての行動をすることができた。このことから、看護師の説明は、子どもが手術に向けて「自分がやること」を理解するのに効果があったと考える。親や医師による説明に加えて、看護師による手術の説明が有効な支援であることが示唆された。

P1-085

幼児をもつ保護者が実施する熱中症予防行動と認識に関する実態調査

松本 祥弘¹、藤田 千春²、荒木田 美香子³¹麻生総合病院、²杏林大学保健学部看護学科、³川崎市立看護大学看護学部看護学科

【目的】

近年の温暖化にともなって熱中症は小児の生命を脅かす症例の一つとなっている。夏の野外を歩いた場合、身長の高い小児では周辺温度が高くなること、乳児期に比べて活動範囲が広がることから、成人よりも熱中症リスクがある。そのため、幼児の養育を担う保護者が幼児の熱中症予防に努める必要がある。今回、幼児をもつ保護者の熱中症予防行動の実態とその認識の実態を明らかにすることを目的に調査を行った。

【方法】

保育所に通っている 3・4 歳児クラスの幼児の保護者 1030 名を対象に 2020 年 6 月～10 月迄、無記名自記式質問紙による横断調査を実施した。調査項目は対象の属性、環境省が提示している熱中症予防項目についての実施状況、幼児の保護者による熱中症に関する認識、罹患性の認識・重大性の認識、予防行動のきっかけ等であった。質問紙配布は保育所園長に依頼し、留置法で回収した。分析は、全項目の記述統計および、熱中症予防行動総得点と属性変数、幼児の保護者による熱中症に関する認識、罹患性の認識・重大性の認識について Mann-Whitney U test と Kruskal-Wallis test を行った。各検定における有意水準は、0.05 未満とした。本研究は、所属していた大学の倫理委員会の承認後に行った。

【結果】

返送は 675 名分（65.5%）得られた。欠損の多いものを除外し 537 名を解析対象とした。保護者の平均年齢は 36.2 歳（SD ± 5.3）であり、続柄は母が 92.9%であった。熱中症予防行動の実施状況を 5 点満点として、5 項目尋ねたところ、「暑さに慣れさせる」は平均 3.7 点であったが、「水分補給」「衣服の選択」「衣服の着脱」「観察と対応」は平均 4.4 点以上であった。幼児への熱中症予防行動のきっかけで最も思うものは「周りの人がしていたから」13.8%、「自分が熱中症にかかったことがあるから」11.9%であった。また、熱中症予防行動総得点と「熱中症予防を心がけることで子どもが健康に暮らせると思う」に正の相関が、「熱中症予防行動を大変だと思う」に負の相関がみられた。

【考察】

幼児をもつ保護者に対し、熱中症予防を心がけていくと子どもの健康な生活につながる事を健康教育等で示す必要性が考えられた。また、熱中症予防行動を大変だと思う保護者にも手軽な熱中症予防行動を指導し、負担感が生じない支援を提供する必要性が示唆された。